KURENAI : Kyoto University Research Information Repository

Title	監督エドガー・G・ウルマー研究 --マイノリティ映画作家の領域横断的映画遍歴におけるマイナー性の諸相--(Abstract_要旨)
Author(s)	平井, 克尚
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2014-09-24
URL	http://hdl.handle.net/2433/192201
Right	許諾条件により本文は2015/06/01に公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	ETD

Kyoto University

（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	平井　克尚
論文題目	監督エドガー・G・ウルマー研究 ―マイノリティ映画作家の領域横断的映画遍歴におけるマイナー性の諸相		

（論文内容の要旨）

本論文は、「B級映画の帝王」として有名であった映画監督エドガー・G・ウルマー（1904－1972）の、従来、断片的にしか知られていなかった多様な映画的遍歴を、イディッシュ映画をはじめとするマイノリティ映画を通して論証し、その延長線上で、アメリカ映画におけるジャンルの多様性の実践を考察し、伝記的人生における地理的領域の横断的遍歴によるマイノリティ映画監督エドガー・G・ウルマーのマイナー性の諸相を全4部、全13章で考察する。

第Ⅰ部（第1、2章）ではウルマーの最初期ドイツ映画を論じる。第1章では、のちにウルマー同様、アメリカ映画作家となるロバート・シオドマクらと共同製作された『日曜日の人々』（1929）を考察する。まず、本映画がスタジオ・システムを擁する製作会社で製作されたものではなく、そこから離れて自主製作されたものであることの革新性を論証する。そして、この傑出した映画の製作者たち及び登場人物たちの無名さに呼応するこの映画の簡略なプロットと製作のインディペンデント的身振りの画期性、かつ本映画の製作にあたり、同時期に製作されたソヴィエト（ロシア）の革命的（革新的）映画からの影響を受けつつも、意識的にそこから距離をおく自覚もあったこと、そして友人同士で製作するドイツ映画自主検閲的作用が働いたことを提示する。第2章では、アメリカ大手映画会社でウルマーが担当するハリウッド恐怖映画『ブラック・キャット（黒猫）』（1934）を分析し、本映画が多様な視聴覚的モチーフにより織り上げられる十全たる映画テクストであり、とりわけ表現主義様式とバウハウス様式との衝突的合体性が見られることに着目する。それにより、本ジャンル映画「恐怖映画」において、恐怖感の雰囲気の醸成よりも、むしろ二面的様式の衝突という表象に画期的重要性があることを論証する。

第Ⅱ部（第3-6章）では、中期のイディッシュ期に製作されたマイノリティを対象にしたマイナー映画を論じる。第3章ではイディッシュ映画『グリーン・フィールド』（1937）における、伝統的イディッシュ文化とテクスト性との奇妙な連繋を論じる。すなわち、本映画がマイノリティの文化的共同性を単に補強するものではなく、映画史的記憶により織り成されたテクスチャーであることが示される。また、ウルマー監督のマイナー性は、単にマイナーなイディッシュ語映画であるゆえにとどまらず、被写体でもあり製作集団でもあるマイノリティにより製作された本映画の物語内容とテクスチャアリティとが不協和を示しながら創造されることを論証する。第4章では、イディッシュ映画『シンギング・ブラックスミス』（1938）について、ユダヤ的伝統文化と合衆国の共通文化との「あいだ」における独自な観点で論じる。そして両者「間」というポジションが、ウルマーによる本映画がマイノリティの文化的共同性を単に補強するものでもなく、ハリウッド映画として成功するものでもなく、それら各々の力が累乗化されることを論証する。第5章

では、イディッシュ映画『ライト・アヘッド』（1939）を、登場人物たる盲目孤児により触知される空間の観点から論じる。それにより、この映画におけるセット空間とロケーション空間がいかに特異なものであり、観客はそれを、盲目孤児が触知するように触知しなければならず、その触知の強度に応じて映画内の言説読解はアレゴリカルなものとなることを論証する。第6章では、ウクライナ映画『コサック・イン・エグザイル』（1938）を考察する。従来、総体的に論証されることのなかったウルマーによるウクライナ映画製作の基礎的データをリサーチし、本映画もまたウクライナ文化の文化的共同性を強化するのではなく、多様な映画史的記憶により織り成されたテクスチャーであることが示される。

第Ⅲ部（第 7-10 章）ではハリウッドにおける PRC 映画を論じる。第 7 章では、現在「B 級映画の帝王」と呼ばれるウルマーと、膨大に存在していた米国の B 級映画製作会社の中の一つ、PRC でのウルマーの演出を支えてきたプロデューサーたちとの含蓄的絡み合い、およびマイナーな PRC の過酷な条件下、ウルマーがいかに錬金術的に映画監督したかを考察する。第 8 章では、PRC 期の貧困化におけるフィルム・ノワール（暗黒映画）『まわり道』（1945）を考察する。まず、本映画製作にあたり原作小説『まわり道』をいかに PRC が獲得し、映画化したかの経緯を見当し、次に、本映画の貧困製作における種々の短調性（上映時間、主要登場人物、製作費、撮影期間、室内セット）を考察する。その上で、映画テクストにおける大胆かつ繊細な構造を解明する。さらに第 9 章では、映画『まわり道』において過剰なまでに使用されるリア・プロジェクションのもたらす特異な効果に着目する。それにより、本映画製作における過酷ゆえの単純性にもかかわらず、大胆かつ繊細な演出による傑出性が明らかにされる。第 10 章では、『まわり道』で過剰に使用されているフラッシュバックがもたらす特異な効果に着目する。それによって、本映画に当時の古典的ハリウッド映画の有効かつ広範なジャンル映画（フィルム・ノワール）の均衡を踏み越えた過剰な細部が編入されていることを明証する。最後に、本映画になされた様々な批評を検証することにより、本映画が決して完結しうる単純な作品ではなく、映画批評によっても多様に織り直される、すぐれた映画であることが示される。

第Ⅳ部（第11、12章）ではウルマーの後期映画を論じる。第11章では、西部劇終焉期がはじまる時代に製作された西部劇『ネイキッド・ドーン』（1954）を考察し、本映画に見られるブレヒト的演出とロング・テイクの特異な効果に着目し、ウルマー映画のマイノリティ性が稀有で特異なものとして、いかに一貫しているかが明らかとされる。

第12章では、最晩年の映画のひとつ『アトランタイド』（1961）を考察する。本映画に内在する多様なジャンル映画パターンの混淆性に着目することにより、一見完成度の低い出来の悪い映画に見える本映画が（無名俳優の起用、同時代の安価なテレビ映画のような雰囲気、拙劣な繋ぎ、奇妙なコスチュームなど）、ハリウッド映画体制の変革期に、その根底で呼応する先駆的な実験精神に溢れたものであることが明らかとされる。

（　続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、従来「B級映画の帝王」として映画史的に有名なエドガー・G・ウルマーを、多様なマイノリティ映画を製作していたことを論証することによって、マイノリティ映画監督と位置づけし直し、彼の映画の傑出性を一次資料リサーチを通して、実証的かつテクスト分析的に考察した結果、ウルマーの監督映画作品に見出されるマイナー性を解明した論文である。また、ウルマー映画についての先行研究を踏まえたうえで、先行研究の空白を補填しうる重要な研究であることも明らかにしている。

オーストリアの映画研究者シュテファン・グリッセマンにより世界で初めて公刊された未邦訳のウルマーの伝記的記述の高いモノグラフ研究書（『影の男―監督エドガー・G・ウルマー』[2003年]）において、ウルマーの映画の詳細なテクスト分析的な研究をグリッセマン自身も自らの課題としていたが、本論文は、さらに従来の映画史研究の欠落を埋めるウルマーの映画受容史の新しい映画史的背景を明らかにしている。

本論文の論証考察は、全13章（250ページを越える膨大な論文）を通して、映画製作の諸条件の調査と映画のテクスト分析を通じて、ウルマーの映画が、いかに特異なマイナー性のものであるかの解明に向けられている。前期から中期を経て後期にいたる全13章が、ウルマーの作品におけるマイナー性という主題をめぐる論考として重層し、そのマイナー性が、製作諸条件、映画テクストにおいてどのように解釈しうるのかを精緻に分析した点が評価できる。なぜなら、従来のウルマー映画研究では取り上げられていなかったアーカイヴ収蔵の一次資料（ウルマーの映画から、脚本、書簡、ショットのエクセル・シート、パンフレットなどまでに及ぶ）リサーチや、当時および現代に刊行された映画批評、映画研究書籍、および雑誌等に掲載されたウルマー本人の映画に関する記述等を網羅的にリサーチし、本論文の扱う領域の広汎性と一次資料リサーチ分析の結果は、ウルマー映画の新たな画期的分析として充実している。

第Ⅰ部、第1章で申請者は、ドイツ映画『日曜日の人々』研究における基礎的な一次資料（ベルリンのシュティフトゥング・ドイチェ・キネマテークに所蔵されている、検閲カード、全ショットのエクセル・シート、上映プログラム、製作関係者たちの書簡、個人への招待状、契約書）や映画上映時に刊行された映画雑誌、製作関係者、映画製作者、映画批評家・研究者などによる著作、批評、自伝、インタビュー等を網羅的に調査分析することによって、本映画における監督問題のみならず、本映画と同時代にソヴィエト（ロシア）においてジガ・ヴェルトフにより監督された傑出した映画『カメラを持った男』からの刺激について、より具体的に実証、解明した点が評価できる。つづく第2章では、映画『ブラック・キャット』のテクスト性を解釈する際に、ロサンジェルスのマーガレット・ヘリック・ライブラリーに所蔵されている脚本、検閲報告と照合させながら、本映画における表現主義様式とバウハウス様式との衝突が見られることに着目し、本ジャンル映画「恐怖映画」の特異性の解釈が評価できる。

さらに、中期イディッシュ期に製作されたマイナー映画を扱う第Ⅱ部の第3章では、イディッシュ映画『グリーン・フィールド 』（1937）がマイノリティを捉えたマイナーなイディッシュ語映画にとどまらず、被写体でもあり製作集団でもあるマイノリティにより製作された本映画の物語内容と映画テクスト性が不協和音を示しながら演出されているという極めて稀少な映画であることを論証している。第4章の研究意義は、イディッシュ映画『シンギング・ブラックスミス 』（1938）を、ユダヤ的伝統と合衆国的成功との「あいだ」における観点に着目し、本映画がマイノリティの文化的共同性を単に補強するものでもなく、アメリカ映画として成功するものでもないオルタナティヴ性を示すものであることを解明している点にある。第5章では、イディッシュ映画『ライト・アヘッ

ド』（1939）を映画の登場人物である盲目孤児により触知される空間の観点に着目し、この映画におけるセット空間とロケーション空間がいかに特異なものであるかを明らかにしている。第6章では、従来、イディッシュ映画の製作期と重なることもあり、言及されることが少なかったウクライナ映画『コサック・イン・エグザイル』について、本映画を所蔵しているUCLA（カリフォルニア大学ロサンジェルス校）のフィルム・アーカイヴにおいて視聴調査を行い、ウクライナ文化と映画テクストの軋みに着目し、本映画がナショナリスティックな物語を単に補強するようなものではなく、多様な世界映画史的記憶により織り成された十全たる映画テクストであることを論述したことも評価に値する。

そして第Ⅲ部、第7章では、ウルマーが「B級映画の帝王」と呼ばれる時期の映画群が製作されたマイナーB級映画製作会社PRC（プロデューサーズ・リリージング・コーポレーション）の製作諸条件について諸文献を網羅的に調査し、B級映画会社ゆえに潤沢な予算、高額な報酬、余裕ある撮影日数、用意周到な配給システム等の不在性をまとめている。第8章では、PRC期に製作された映画『まわり道』を、本映画の製作会社による諸条件の単純さに着目し、そのうえで映画テクストを考察し、製作における過酷な単純さにもかかわらず、本映画がいかに傑出した作品であるのかを解明している。第9章、および第10章では、第8章における考察の延長として、当時の古典的ハリウッド映画手法を過剰なまでに使用することによる特異な効果に着目することによって、『まわり道』の具体的なテクスト分析を実施し、新たな解釈を提示している。

第Ⅳ部では、従来、1945年製作の『まわり道』がフィルム・ノワールの代表作として取り上げられることが多く、1950年代以降のウルマーの諸作品に関して厳密に論証されることがなかったので、第11章では、1950年代に製作された西部劇『ネイキッド・ドーン』（1954）を取り上げ、ベルリン自由大学アーカイヴに所蔵されている本映画（後にDVD化）を視聴調査し、さらにベルリンのシュティフトゥング・ドイチェ・キネマテークに所蔵されている、本映画が製作期に取り交わされた製作者たちの書簡等をリサーチし、実証的かつテクスト分析的研究を遂行したことは高評価に値する。第12章では、1960年代初頭に製作された映画『アトランタイド』（1961）を取り上げ、本映画を、ベルリンのシュティフトゥング・ドイチェ・キネマテークに所蔵されている、これまで論証されていなかった本映画が製作されるにあたって取り交わされた製作者たちの書簡やロサンジェルスのマーガレット・ヘリック・ライブラリーに所蔵されている脚本を調査、照合しながらテクスト分析を実行したことも評価に値する。

最後に、ウルマーの短編教育映画を考察する「補論」でも重要な議論が行われている。米国メリーランドのThe National Archives at College Parkにおいて、ウルマーの短編教育映画群の調査を行い、そのひとつ *They Do Come Back* に、ウルマーにより監督・製作された版とNTA（全米結核協会）により再編集された版の2つの異質ヴァージョンに着目し、その差異から、ウルマーによる短編教育映画群が、実はニューディール期に製作された優れたドキュメンタリー映画群と同じ強度を持つ傑出した作品であることを論証している。こうした映画史的事実は、従来の映画研究では不可視であった映画史の一側面を鮮明に浮かび上がらせており、本論文の学術的意義は高くなる。

もっとも、本論文は広い知的射程をもつ実証的かつ映画テクスト分析的研究であるが、ウルマー映画の膨大な全作品分析については、さらなる考察の余地を残している。

とはいえ、本論文は、世界の人間の文化的・社会的変容に少なからぬ影響を及ぼしてきた映画史に、いくつもの新たな発見を得たがゆえに、共生人間学専攻、人間社会論講座の理念に十二分に適う研究である。よって本論文を博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また平成26年6月26日に、論文内容とそれに関連する種々の事項についての口頭試問を行なった結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降